

当資料は、『甲賀市史第7巻』より抜粋しました。
『甲賀市史第7巻』は、絶賛発売中です。



販売価格: 1冊3,500円

お問い合わせ先

歴史文化財課 市史編さん室

所在地/〒520-3393甲賀市甲南町野田810番地 甲南庁舎3階

電話番号/0748-86-8075 FAX/0748-86-8216

E-mail/ koka30109000@city.koka.lg.jp

61 黒川氏城跡

土山町鮎河小字坂尻

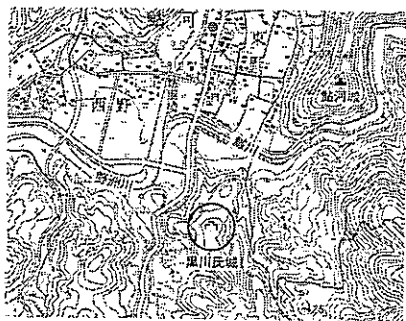


図163 黒川氏城跡位置図

黒川氏は鈴鹿山脈の西麓近くにある比高約八〇メートルの山上に築かれている。南側のみが尾根続きとなり、北側は鮎川が流れ、対岸には土山町鮎河のうち東野集落がある。城域は東西約二二〇メートル、南北約三三〇メートルに及び、甲賀郡域では水口岡山城（水口町水口）に次ぐ規模を誇る。

主郭の曲輪Ⅰは長方形で周囲に土塁をめぐらしている。

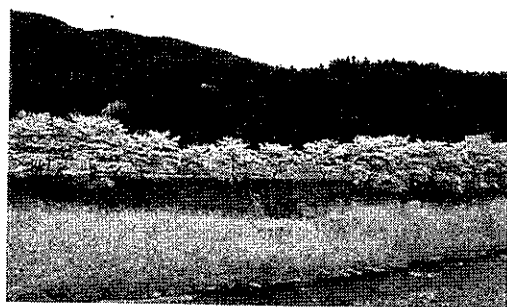
虎口は西側のa、北側のbがある。虎口周りは石垣で固められ、土塁内側は石を階段状に積み上げた雁木としている。aを西側に下がった位置には方形の虎口受けcがあり、南側に下る石段と脇の石垣が良く残されている。

曲輪Ⅰの南には横堀d、曲輪Ⅱ、堀切eが設けられ、南側尾根続きに対処している。虎口受けcからの導線は虎口fを通り、曲輪Ⅲで二方向に分かれる。虎口gで西側尾根筋に出る導線、虎口hで南東斜面側に

出る導線である。

一方、虎口bからの導線は北東側へ下る。そこからiの横堀底部を下って虎口jに至る。虎口jでは導線が四方向に分化する。四方向からの導線を集約しているといえ換えることもでき、城の大手と評価できる部分でもある。虎口jの北・東・西側には堀・土塁によって囲い込まれる曲輪群が広がる。虎口jから北側山麓にのびる導線は、途中に虎口kを設けている。

虎口kの裾にも導線沿いに曲輪群が連なる。ただし切岸によって相互を区画し、個々の面積も小振りである。



写179 野洲川対岸からみる黒川氏城跡

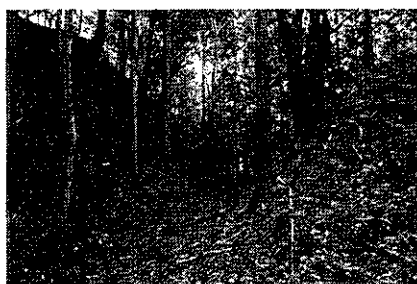
このうち虎口k直下の曲輪Ⅳは「辻屋敷」、その北側の曲輪Ⅴは「前田屋敷」と呼ばれている。辻屋敷は『甲賀郡志』に記される黒川氏家臣辻和泉にちなむ可能性が高い。これら曲輪群は家臣団屋敷跡と考えられる。虎口iより上方に広がる曲輪群も家臣団屋敷跡



写180 曲輪Iに至る虎口受けcの石段(右上が曲輪I)



写181 曲輪Iの西側虎口南の雁木



写182 曲輪I南側の機堀d(右が曲輪I)



写183 曲輪VIの虎口脇を固める石垣

だろうが、「辻屋敷」「前田屋敷」などよりも上級家臣層の屋敷地であったと考えられる。家臣団屋敷の西側は尾根を一部削り出して土塁状に整形している。北東側の高まりは自然地形をとどめているが、東側は横堀・堅堀^{せきぼり}によって屋敷群を囲んでいる。

「辻屋敷」「前田屋敷」の脇を通る導線は、現状では山麓近くで途絶えている。近年設けられた道によって破壊されているためである。しかし破壊以前、山麓部がほ場整備される以前は、雑壇^{ぞうだん}状になった水田の間を一本道が鯨川までのびていた。さらに鯨川を越えた対岸の延長線上にも道があり東野集落へのびていた。鯨川を挟んでのびる道は、城主黒川氏の墓参道と伝わる。

黒川氏城は全体の規模や比高、複数の曲輪を有し、家臣団屋敷と考えられる曲輪も備えることなど、他の甲賀郡域に存在する城郭とはかなり異質である。

石垣の石材は比較的大きい。また石段の幅は約三・五メートルであるが、前後の導線も近似する幅であったことが考えられる。

曲輪の構成も曲輪Iは山上にありながら方形とし、西・北には対称状に虎口を設ける。曲輪配置も一見粗野のように見えるが、導線と虎口の関係で見ると、ほぼ対称状に曲輪をつなぎ、相互を連絡している。

さらに虎口kを挟んで、家臣団屋敷に比定される曲輪群の構

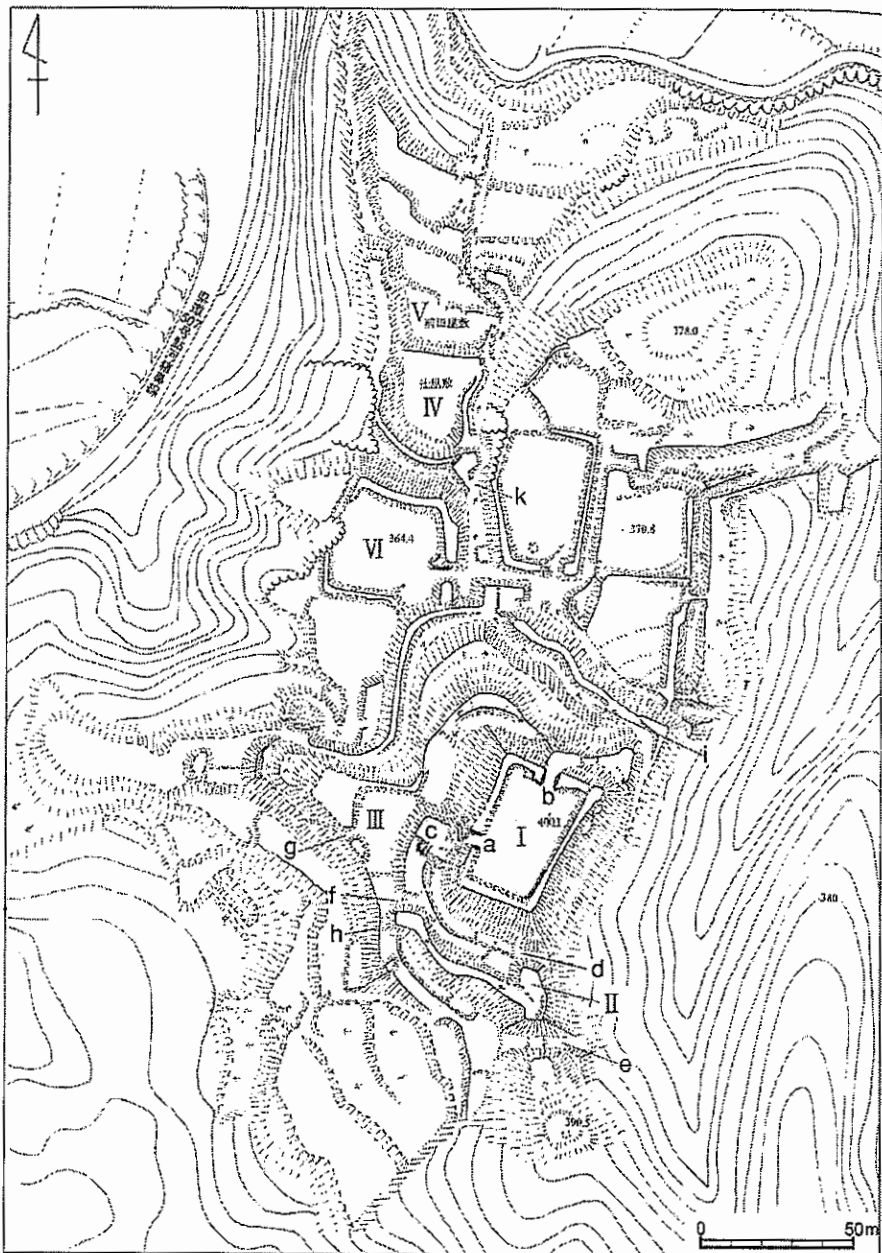


図164 黒川氏城跡要図

(高田 徹作図)

造に格差を付けている。また虎口じく、そして賊川畔までのびる導線に対して、曲輪群は向かい合って配置されている。

このような縄張からは、極めて計画的に造られた状況がうかがわれ、段階的に改修を加えたような痕跡は認めにくい。かつ曲輪群の階層性が意識されながら、全体を防御しようとする意識も認められる。一時期に、ほぼ一氣に築かれたのが現状遺構であると考えられる。

本城の城主と伝えられる黒川氏は、土山町黒川を本拠とし、代々六角氏に仕えたが、天正十三（一五八五）年の「甲賀破儀」（「甲賀ゆれ」）により改易、城も廢城となつたとされ、『甲賀郡志』も本城は永祿年間（一五五八―七〇）に黒川玄蕃佐によつて築かれ、天正十三年に同氏滅亡とともに廢墟となると記している。

旗本となつた黒川氏の家譜を載せる『寛政重修諸家譜』によれば、黒川玄蕃助盛治は六角氏からの織田信長に仕え、徳川家康のいわゆる「伊賀越え」にあつては弟を人質として出し、その後駿府で閑居していた。慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の合戦時には山岡道阿弥に従つて参陣し、戦後甲賀郡内において八〇〇石余を賜り、その子盛至の時、咎めを受けていったん改易されるが、その後再度旧知を復せられたとある。黒川の妙蓮寺には今も旗本家としての歴代の墓所が伝えられる。

従来、本城の築かれた時期は、黒川氏が改易されたという天正

十三年以前に求められることが多かった。しかし同年以前に甲賀郡域で黒川氏がこのような城郭を築けるほど突出した存在であったことをうかがわせる状況はない。

また曲輪Ⅰに存在する雁木は、近世城郭ではしばしば用いられるが、近畿の中世城郭では現在のところ類例を見ない遺構である。したがって黒川氏城の雁木も近世城郭と近い時期に築かれたもので、計画的に造られた縄張も同時期の成立と見なすのが妥当である。一方で掘底遺のような土造りの技術が駆使されている点や、瓦が城域で全く見られないのも注意される。

歴史的にははっきりしないが、現状遺構は、黒川氏が関ヶ原の合戦後、旗本となり家康に仕えたその頃に築かれた可能性が高いと考えられる。瓦が出土せず、土造りの技術が駆使されるのは、近世初頭の小領主の城郭としての限界・実態を示しているのではないだろうか。同時に甲賀郡の城郭の最終的な発展形態の一例、と位置付けることができよう。

（高田）